



すたぢ

徳島大学附属図書館報 No.41

1990.4.

新入生のみなさ～ん？
御入学おめでとうございます？



図書館について考えること

宮本博司

大学図書館はどのようにあるべきか。昔から実に多くの論議がなされてきた。多分、大学に図書館ができてからずっとなされてきたことであろう。そして今後とも果しなく続いていくことであろう。だからといってこの議論が実りのない馬鹿げたものだとするわけにはいかない。大学の図書館といっても世の中から孤立しているものではない。時代の影響を受けながら絶えず脱皮しなければならないからである。大学図書館の意義についてはずっと以前から関心があり、特に館長に就任してからは当然のこと、この課題が片時も頭から離れたことがない。

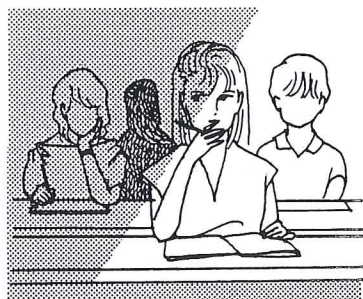
大学図書館の理想像について、我が大学でも実に多くの教官が関心を持ち、多様な意見を窺う機会があった。学生諸君からも教官とは一味違う貴重な意見を聞くことができた。率直に云ってこれらの意見はいずれも尤もなものであると同時に納得のいかない面をも持ち合せている。この合理性と不合理性の共存が、大学図書館の現況をそのまま反映し、さらにまた将来の問題点を指摘しているのかもしれないので、できるだけ広く意見を聞き、吟味し、図書館運営に役立てようと思っている。これらの意見をまとめてみると、結局はごく常識的な2つのカテゴリーに分類さ

れることがわかる。1つは大学のアカデミズムを失わないこと。この主張は主に教官側から出された場合が多かったが、学生の中にも賛同する者が少なくない。第2は開かれた大学であること。これには社会の要請に応じる意味と、社会の現状に即応するという意味が含まれている。大学図書館の社会開放は好ましいことであり、必ずしもアカデミズムを否定することではないが、時によってはアカデミズムと対立することもあり、この開放の度合については慎重な検討が必要である。館長としては両者の主張を個々の問題について細かく考慮し、バランスよく採用することによって図書館の存在価値を高めることができると信じている。

次にこれらのことに関連して少し具体的な問題について考えてみよう。大学のアカデミズムは深い歴史的背景をもち、その本質に触れる重要な概念である。この点に関し、大学図書館は教育・研究に必須な情報の中枢としての役割を担ってきた。ところが、現実の運営においては予算上の制約から学生・研究者の要望に十分応じることのできる書籍・雑誌その他の資料を購入することができない。そこでいろいろな事情を考慮してできるだけバランスのよい購入を心がけなければならない。これは非常に難しいことであり、今後とも努力を続けなければならない。次に集中化の問題がある。集中化の進んだ欧米の図書館を参考にし、私達も可能なかぎりこの方向に進むべきであるが、同時に研究者の利用能率をも考え、性急にならないよう粘り強く取り組むべきであると考えている。開かれた図書館については、大学図書館の保有する専門情報を一般社会へ開くと同時に、外部情報の迅速な取りこみを目指すべきである。このため他の図書館、特に大学図書館との情報ネットワークを密にして、情報伝達の遅れを防ぐ準備を十分に行なう。幸い本年度から全国的なコンピュータ・ネットワークに参加する準備ができ上りつゝあり、学術情報センターを中心とする組織に加盟することが可能になった。この意味で本年度は情報元年となる。

以上、紙面の制約もあり、少々粗雑な考えを述べて諸者諸氏をむしろ混乱させたかもしれない。しかし複雑で広範に亘る業務を担っている図書館の使命は今後ますます大きくなることは否めない。支障のない運営を行なうのみならず、今後ますます発展を続けていくためには、全図書館員のたゆまぬ努力が必要であることはいまでもない。学生・教官・職員を含む全大学構成員の御協力を望むものである。

(附属図書館長)



「わたしの学習方法」

前田 孝

普段あまり勉強をしていない私にとって、図書館の勉強法を述べるのはおこがましいのですが、蔵本分館にはほとんどが専門の図書や雑誌が中心です。そのため、私は専門教科のレポートを作成するときなどに主として図書館を利用しています。蔵本分館には専門の図書といっても、大変難しいものから初心者のためのわかりやすく丁寧に書かれた入門書まであります。私は主として後者の図書を利用しています。

入門書的な本を軽い気持ちで読むことによって、専門の難しい本を読む際にはとても役に立ちます。これは講義以上に印象が残り、単に試験のための棒暗記と違っていつまでも印象深く、自分のものになると思います。また、自分の興味を持った病気などを調べるとき（私の場合、真性赤血球増多症など）にも1つの病名だけを取り上げた本もあるので、大変興味深く読むことができます。

図書館には、大学院生の方や研究員の方などがよく洋雑誌などの文献を見るために本を借りに来られるのを見かけます。そういう光景をいつも自分にはほど遠い人である様に思っています。しかし、自分も将来はあの方達と同じ様に単に試験勉強と違った自分のための勉強として、図書館を利用したいと思っています。

(医療短大看護学科1年)



「わたしと図書館」

鳥本 祐佳里

私は多くの場合、特に目的もなく図書館に行きます。何かを調べたい時や、勉強しようと思う時に行くこともありますが、結局いつも必要な文献を探しているうちに、つい本棚に並ぶ他の様々な本に目移りしてしまい、ちょっと取り出して読んでみたくなくなってしまいます。特に友人やその他の知人に勧められた本、あるいは以前読んで感動した本などをみつけるとなぜかうれしくなって手に取ってみたいくなるのです。それで少しだけ読むつもりが、いつの間にかその本の世界に引き込まれて、気付いたときには相当時間がたっているということがよくあります。でも不思議なことに、本の世界に引き込まれてその世界に浸っていると幸せな気分になれるのです。そうなるのもやはり図書館の持つ独特の雰囲気の良いからだと思います。どこが好きというわけでもないのですが、なんとなく足を運んでしまうのです。そこが図書館の最大の魅力ではないかと思っています。

(総合科学部総合科学科1年)

本とテレビ

近藤 秀治

私は、あまり本は読まないのですが、年に一度か二度、素晴らしい本に出会います。そんな本は現実の話ではないのに、つい本の中のにめり込んでまるで自分が主人公であるかのように、私を魅了するのです。

活字離れが進む現在、テレビドラマなどを見て感動したといっても、それはただテレビの中の人に共感を覚えるくらいのことでしかできず、例えばその主人公になりきることはできないと思うのです。

とはいつても、テレビは時代の最先端をいくものですし、便利だからやはり、私は本よりテレビの方を選ぶでしょう。だから、これからも年に一、二冊素晴らしい本がみつけれられるように暇をみつけて読書しようと思います。

(医学部医学進学課程2年)



図書館でバイトする立場から

桑原 千穂

図書館でバイトを始めて早一年経ちます。その間にいろいろな学生と接しました。礼儀正しい人、そうでない人、わけのわからない人、腹が立つ人、本当にいろいろです。図書館の受付での仕事は一種のサービス業で、学生は言わばお客さんです。正直言って私は感情がすぐ表に出る方なので、お客さんの態度によって私の態度も変わります。特に最近の学生（私もそうなのですが）には、なぜか偉そうな人が多いので、そんな人達の態度を見て私はこうはならないでおこう、などと考えたりもします。その点、昼間働いている方々は誰にでも親切で丁寧で、本当に感心させられます。私も見習わなければ、とは思うのですが…。これからもバイトを続けますが、気持ち良く働けて、お客さんも気持ち良く利用できるような図書館であるよう、お互いに協力しあえたらと思います。

(総合科学部総合科学科2年)

「私の思い出」

河野 まき

私が図書館でのバイトを始めてから早くも一年がやっけていっています。受付カウンターに座っていると、当然のことながら図書館を利用している人に出会い、その人達が自分の所へ持って来てくれる本や雑誌やCDに出会い、また日常のトラブルに出会います。そういった出会いの中で、私は本当に多くの刺激を受けました。やっぱり言語はコミュニケーションをとる上で重要であるという事、いろんなトラブルもどこかには抜け出せる道があり、それを見つけようとする努力を惜しんではいけないという事、そして一緒に考え悩んでくれる人の暖かさ、図書館はありとあらゆる情報の宝庫であるという事、バイトではあるけれど仕事はきびしいものがあるなという事etc. …この刺激を自分に生かしたいと思います。至らない点も多々ありましたが、一年間いろいろお世話になりました。

(薬学部薬学科2年)

「私の資料整理」

深町 真

今、情報化が時代の流れとなっています。徳島大学においても、かなりの数のコンピュータがあるようです。コンピュータを使えることが必須となると、ある先生がおっしゃったことがありますけれど、私も同感です。コンピュータは、物理的に見れば単なる精密機械です。しかしソフトさえそろえれば何でもこなせるという特徴があります。

私は、あまりきちんとした方ではないので、集めた資料も、読んだらどこかにおいてそれっきりということがたいていでした。しかしだんだんそれでは困るようになってきましたので、これは重要だと思ったらすかさずカードに書きこむようにしています。カードといえば、これは私に合っているようで、いろいろ書き集めてきたものをあとでながめるようにしています。ノートや手帳とちがって後で補充できるのが便利なところです。

さて、カードは確かに便利ですがかさばってしまいます。またどこにいったかがわからなくなることもあります。そこで登場するのが、コンピュータとデータベース・ソフトまたはワープロソフトです。この組合せならフロッピーディスクをもち歩くだけですし、必要なときは印刷すればいいわけです。といっても実践しているわけではありません。

私はこの一年間このアルバイトをして、いろいろ貴重な経験をしたと思います。うまくいかないで人に迷惑をかけた方が多いでしょうが、それももうこの3月で終わりです。どうも一年間ありがとうございました。そして図書館の職員の方皆さんには何かとお世話になりました。ここに敬礼申し上げます。これからは、一人の利用者としてお世話になると思います。

(総合科学部総合科学科3年)



図書館雑感

西林正人

附属図書館でCDの貸出がなされていると知った時、音楽好きの私は大喜びでした。さっそく借りたいものを決めて、カウンターへ行きましたが、「書庫は5時に閉まりますから、貸出できません。」とのことでした。この時、私は初めて“時間外閲覧”の意味を知りました。つまり、5時をもって附属図書館の全業務は終了し、8時まで開架図書の閲覧と貸出のみ（この作業は通常アルバイトの方々による）を行っているのです。よって、CDは書庫内にあり閉架されているので、5時以降は借りられないのです。失望とともに「どうすればいいんだ？」という思いにかられました。その頃は結構、授業がつまっております、5時までに図書館へ行くには、休けい時間が昼休みでしたが、昼は食事しますし、どちらの時間もわずかなものであることは、自治会でも問題になっていました。私は、毎日授業がつまっているわけではなかったのに、日を改めて借りに行けばよかったです。そのような借り方自体、「利用者が、図書館に合わせる」といった図書館の事情中心の考えです。工学部の学生のように授業と実験などで、日中身動きのとれない方々は、どうするのでしょうか。

このような問題は、公共図書館にも、そのまま当てはまると思います。徳島市内にある県立、市立の両図書館は、いずれも午後6時頃に閉館となり、県立図書館は日曜日が休館です。勤労者は5時に仕事が終了するとしても、移動時間などがあり（ここに図書館の設置場所についての問題があることをお忘れなく）実際の閲覧時間は1時間もありません。もし、退社時間が5時を過ぎれば（現代の日本では、これが一般的だといえますが）閲覧どころか借り出すこともできません。それなら、日曜日に来館して下さい。」というのが、図書館側の意見かもしれません。事実、徳島市立図書館発行「図書館この1年」平成元年度版を見れば、“貸出冊数、貸出者数ベスト10（昭和63年度）に挙げられた曜日は、8月18日の木曜日を除きすべて日曜日です。しかし、このような状況でよいのでしょうか。一部の業種の方々を除けば、勤労者にとって日曜日は休日であり、家族サービス、社外の友人との交流、家での休養といった様々な事情や用事のある日ではないでしょうか。日曜利用者の中には「平日貸りておけないものだろうか」「平日貸りれたら、今日ゆっくり読めるのに」と思っている方も、少なからずいらっしゃるのではないでしょうか。

このような開館時間における問題は、図書館共通のものであり、図書館職員の勤務時間に起因するものといえます。だからといって、職員の勤務時間延長をもって解決しようというのではありません。図書館職員もまた、先に述べた利用者と同じ勤労者であり、各人にも生活というもの

があります。また、図書館職員は公務員であり、法令によって1週間あたりの勤務時間は定められています。それでは、どのようにすればよいのでしょうか。次に述べるのは私の意見であり、一例にすぎませんのでみなさんも考えてみて下さい。開館時間を9時～23時と設定してみましょう。早番の人は、8時30分～17時30分迄、遅番の人は14時30分～23時30分まで勤務し、遅番勤務は二週間に1度とし、当番日の翌日を休日とする。これに週1回の休館日休日を合わせて、4週6休体制を組むのです。週休2日制が実施されれば、日曜勤務についても同様に交替制とし、ローテーションも組みやすくなるでしょう。このような制度は、正規職員、アルバイト職員、そして守衛（特に夜間必要）の三者協力体制および完全な防火、防犯設備といったものがあつた上で、初めて成立するといえるでしょう。週休2日制への移行を早期実現させるとともに、このような交替遅番制を導入することによって解決を図るのも一方法となるでしょう。図書館は他の行政機関とは違う特別職であるべきだと思います。ただ、上からの勤務時間指定に従うのではなく、利用者の要求を考慮あるいは配慮して、上の者に提案するという「下から上へ」の流れを作り出してゆく努力が、必要ではないだろうか。

このような制度の実施にあたっては、それに要するだけの人数およびその人件費といった予算が問題となるだろう。しかし、図書館が果す役割を考えた時、経済的負担がそうひどくない限り、実行すべきではないでしょうか。また正規の人員を確保しなくても、非常勤またはアルバイトといった補充の仕方もあるでしょう。（現代日本の政治を考えれば、削るべきところが他に多くあるように思われるのですが…）また、別の反論として、現行時間帯での夜間利用状況を統計で示す方も、少なくないでしょう。数字は確かに具体的、客観的なものですが、統計で数値を見ても、そこには潜在利用者、利用自粛者（19時閉館の場合、18時30分に利用要求の事情が起つても、たいていの人は、それが余程重要か急用でない限り、来館しないものです）といった人数は、現れていないといえます。また、夜間利用者が1人でもいる限り、夜間も開館しておこうというのが、図書館の本来の姿ではないでしょうか。「利用者に対し、受け身のサービスをするのではなく、積極的に受け身のサービスをしてゆくべきである。」と、何かの本で読んだが、全く同感です。コンピュータの導入、記録形態の変化など、科学技術の発達とともに図書館は進化してゆきますが、そのサービスの根本は不変ではないでしょうか。「誰のための図書館、何をすべきか？」この根源的な問いを忘れないでほしい、と私は願っています。

以上、述べてきたのは、あくまで一利用者の意見であり、現状に対する認識の甘さ、図書館に関する知識の不足など、いたらない点が多いと思います。そこで、賛成・反対の意見を含め、感想や誤ちの指摘などもお待ちしております。この「すだち」は、年2回しか発行されませんが、みんなで意見を出しあって、図書館職員の方々にも意見をお聞きすることによって、様々な問題点が現れ、何らかの改善策が生まれる場になれば…と考えています。また、それでこそ館報の存在意義も増すのではないのでしょうか。

（総合科学部総合科学科4年）

お知らせ

学外文献の申し込み（相互利用）にファクシミリが使えます

このほど附属図書館にファクシミリ〔富士ゼロックス Able 3010 (G 3)〕が設置されました。設置場所は本館では運用係，蔵本分館では情報調査係です。

送受信は学術情報ネットワークを使用して国立主要大学〔ノード校(G 4)〕を中継して行ないます。

利用料金は通常の郵送による方式に比べて割高とはなりますが，従来の取扱いとは比べ物にならないほど早く，文献を入手することができるようになります。

利用については，文献複写業務に限定して行ないますので，文献の送受信を希望する方は，担当係にお申し込みのうえご利用ください。

なお，本学のファクシミリ専用回線は下記のとおりです。

附属図書館 (0886) 55-9593

蔵本分館 (0886) 33-2950

編集後記

希望に胸を膨らませ，学びと研究の宮に集われた新入生の皆さん！ 素晴らしい前途へ向かって，その一齣を図書館で過ごしましょう。著名な先人からのメッセージを知識の宝庫から受け取って，皆さんの身近な友と共に語り合きましょう。また，名曲を聞きながら瞑想に耽ったり，名画を見ながら鑑賞の時を持ちましょう。図書館では，皆さんのご利用を，お待ちしております。また，皆さんの貴重なご意見をおよせください。皆さんのための図書館を皆さんの手で！

編集：発行

徳島大学附属図書館

(〒770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島(0886)23-2310 内線(6111)

FAX 附属図書館(0886)55-9593 蔵本分館(0886)33-2950